



生涯学習教育研究センター ニュースレター No.1

2004年2月9日発行



❀ 第1回研究会の報告 ❀

1月28日(水) 17:00から「第1回生涯学習教育研究センターの研究会」を教育学部第2講義棟小会議室#22で実施しました。6つの学部、2つの学内共同教育研究センターから先生、学生あわせて30名以上の出席があり、席も足りず、暖房も十分に入らない環境であったにもかかわらず、2つの研究発表と当センターの基本的方向の提案に対して、積極的な質疑と意見交換がなされました。

生涯学習教育研究センター新任教官の研究発表

(1)「科学教育と生涯学習」教授 松野修

研究会の当日、わたしは「科学教育の歴史と生涯学習」というタイトルで発表してもらいました。科学教育の歴史を生涯学習と関連づけて論じたのは、おそらく日本ではこれが初めてでしょう。

「生涯学習」とか「生涯教育」というのは、ある種の教育行政用語です。こういう用語や概念が登場してきた社会的背景や、それが前提とする対抗理論については、いずれセンター長からくわしい解説があるでしょうから、わたしはあえて論及を避けました。しかし、生涯(学習)にせよ、生涯(教育)にせよ、その理念についてはさまざまな角度から論じられてきたとしても、さらに踏み込んで、そこでの教育内容の是非について、具体的な提案がなされることは少ないかもしれないと危惧しています。というのも、わたしがかつて研究していた「社会科教育」の分野では同じことが起こってきたからです。「理念だけは声高に語られても、やっていること前と同じ」というわけです。

そこで当日の発表では、まずはわたし個人が手がけている科学史の研究を紹介し、「その土俵の中に強引に〈生涯学習〉を引き込んでしまう」というスタンスをとりました。そういう強引なアプローチをわたしが示せば、発表を聞いてくださる方の中から、「そんなにいいなら、わたしの研究の方がもっと的を射ている」と発言しやすくなるだろうとの作戦です。作戦がみごとにはまって、多くの方が、まずはご自分の研究内容を公開し、そこからさまざまな提言をしてくださることを期待しています。そうなれば、生涯学習論の内実が豊かになり、ずっと楽しいものになるにちがいないですから。



(2)「環境教育と生涯学習」助教授 小栗有子

今回の研究発表は、自己紹介の機会であったため、前半では、私がこれまで経験してきたこと、それらを通して考えてきたことをご紹介し、後半では、風呂敷を一杯に広げて、私が研究テーマとする「持続可能な開発のための教育」が射程とする範囲や課題、方向性などを当センターの今後の展開と絡めながら報告しました。

私が報告した内容は、これまで日本で議論されてきた環境教育の枠を超え、今国際的に模索が始まっている「持続可能な開発のための教育」について論じるものでした。Sustainable Developmentの訳語を巡っては、90年代前半に日本でずいぶん論争になりましたが、大切なことは、従来のDevelopmentに対抗する概念がなぜ登場したのかというその背景や理由をしっかりと踏まえつつ、「持続可能な開発」の中身を具体的に描いていくことだと考えています。言い換えると、持続可能な地域社会を実践的にどう築いていくのかに関心があり、それを支える教育のあり方を研究の対象にしているといえます。その研究を進めるにあたって、フィールド研究を重視して、鹿児島大学の先生方との連携、地域との連携を実践的に深めていきたい旨をお伝えしました。

私が今回報告した「持続可能な開発のための教育」も、また「生涯学習」も時代の要求によって登場した概念ではありますが、それらをどう解釈し、実践していくかについては、オープンエンドであり、議論と試行錯誤を重ねながら共通認識を高めていくことが、当センターの発展にとって大切であることを感じる研究会となりました。



生涯学習教育研究センターの研究上の基本的方向 センター長 神田嘉延

最初に 15 分ほど当センターの研究上の基本的方向が、3つの項目にしたがって説明がありました。(1) 月1回の割合で定期的な研究会を実施し、学内外の生涯学習の知的財産をセンターに蓄積していく。その蓄積をベースにして共同研究の内容を構築していく。(2) 海外との生涯学習に関する研究交流や調査研究を積極的に展開する。当面は、ベトナムの地域の自立的発展と生涯学習の調査研究と学術交流を展開する。(3) 当面の研究課題としては、全学的に議論されているフィールドサイエンス構想の内実を当センターとしても作り上げていく計画であること。狭

い意味での教育委員会だけの社会行政的な生涯学習ではなく、地域の農林・水産・工業、企業、職業・労働、地域経済、教育問題、医療・福祉、環境問題、協同組合、NPOとの関係で研究を考えていく計画であること。人間的文化をもった「地域自立発展」という視点から生涯学習にアプローチするなかで、地域とより結びつきながら、地域の人々、地域の様々な機関・組織に支えながら進めていく計画。財政的にもそのなかで努力していく研究スタイルをとっていきたい。以上の説明を受けて、貴重な意見が出席者の中から多数だされました。



❀ 第1回研究会の懇親会 ❀



1 回の研究会には、これまで面識のなかった先生方が一同に会されましたので、懇親会ではまず、環境教育の体験と称して、デートゲーム（自己紹介ゲーム）を企画しましたところ、思わぬ盛り上がりを見せ、そのまま和やかな宴となりました。今回のもう一つのアトラクションは、科学教育の体験と称して皿回しが披露され、大いに盛り上がりました。全学の共同研究センターとして、今後とも当センターでは、異なる専門、異なる年齢の方々出会いの場、交流の機会を作っていきたいと思っております。

生涯学習教育研究会の懇親会ということで、参加する前は、少し気後れしていたのですが思うより皆さんとても気さくに話しかけてくださって、色々なお話を伺うことができ楽しむことが出来ました。普段、他学部の教官の皆様と話す機会はあまりありませんので、貴重な体験ができたと思います。生涯学習教育は、今後の社会において、重要な役割を果たすことだろうと思います。その際には、自分なりに協力出来ることをみつけて、一緒に考え、学んでいけたらと思います。

教育学部美術学科の学生さんのコメントです



皿回しにチャレンジする先生方



第2回定例研究会の案内 ※名称を定例研究会にしました

日時：2004年2月25日(水) 17:00～19:00

場所：教育学部 第2講義棟 2階 小会議室#22

内容：「鹿児島大学の生涯学習教育研究センターの使命」センター長 神田嘉延

「鹿児島大学の生涯学習教育研究センターに期待すること」鹿児島大学副学長 矢野利明

❀ 研究会の後に「茶話会」を予定しております。❀

第1回の研究会で盛り上がった懇親会に引き続き、今回は、「夢を語ろう～！あなたならどのようなセンターを建築したいですか」をテーマに楽しい交流会を企画しております。どうぞご参加ください。

なお、飲み物と茶菓子は、こちらで用意いたしますが、「マイ★コップ」（ご自身が使用されているコップ）

をぜひご持参ください。また、一品料理を持ち寄ってくださる方を大歓迎致します！

アルコール がどうしても・・・という方は、持参でご参加くださいませ。





生涯学習教育研究センター ニュースレター No2

2004 年 3 月 8 日発行



❀ 第2回定例研究会の報告 ❀

1 月に引き続き「第2回生涯学習教育研究センター定例研究会」が、2 月 25 日（水）17：00 から教育学部第2 講義棟小会議室#22 で開催されました。この日は、鹿児島大学副学長の矢野利明氏を報告者にお迎えし、21 世紀の大学像と改革の方向性を見据えながら当センターに期待することの話があり、あわせて当センター長から、センターが今後果たすべき使命について具体的な提案がありました。その後、参加者が日ごろ感じている問題を共有しながら、さらなる発展の可能性について意見が交わされました。議論は、その後の茶話会に持ち込まれ、今回も終了したのは9時半過ぎでした。



研究会終了後、思い思いの飲み物を片手に語らう茶話会の様子

(1) 生涯学習教育研究センターの使命

生涯学習教育研究センター長 神田嘉延

鹿児島大学は東京大学でもないし、京都大学でも九州大でもありません。鹿児島大学を〈ミニ東大〉にすることが、これからわたしたちが進むべき方向だとは思われません。鹿大には、鹿大なりの、この地に根ざした独自の使命があるはずです。

じっさい歴史をふりかえれば、この鹿児島大学には、いずれの学部をとってみても、地域に密着した研究成果をあげ、人材を育ててきたという誇らしい伝統があります。そしてその伝統は今でも脈々と引き継がれ、学部、研究室、そして研究者個人の単位で、多くの先進的な試みがなされてきています。

しかしこうした誇るべき伝統は、かならずしも鹿児島大学のスタッフの全員に共有されているわけではなく、また、現在行われている意欲的な試みも、個別な部局の取り組みの枠を越えられないでいると言わざるをえません。

なればこそ、これらの先進的な実践を全面に押し出し、学内外に向かって大いに宣伝していくこと。学内外の意欲的な研究者や実践家を組織し、おたがいに刺激を与えあえるような自由な場を作ること。これが当センターの使命だと考えています。

具体的には、まずは「鹿児島大学にはこんなすばらしい研究、こんなすばらしい教育をしている人たちがいますよ」と、当センターが中心になって大いに宣伝していきたい。そのために、これから「取材班」がお邪魔するはずな

ので、その節はよろしくお願ひしたい。

また、大学の講義は市民に開放し、だれでもが大学の講義が受けられるようにします。もちろんこれは「やりたい人がやるもの」であって、決してすべての先生がたに公開を強要するものではありません。生涯学習センターの活動全体をつうじて、「したくないことはせず、させず」という方針は堅持していかなくてはなりません。とにかく細かい点での詰めはこれからですが、基本的には一般市民の受講料は、その講義を担当する先生の研究費として自由に使えるようにします。

それから市民向けの公開講座もどんどんやっていきたい。その際には、学内の研究者だけでなく、先進的で意欲的な実践家を講師として引き込んでいきたい。そのために、たとえば「特任教授」という肩書きをどうすれば付与できるのか、この点についても検討をすすめています。

わたし自身は鹿児島出身ではありません。しかし「鹿児島が好きだ」という点では、他人にひけをとらないつもりです。〈鹿児島大好き人間〉のわたしとしては、鹿児島がどうしたら自立的に発展していけるのか、そのために知恵と力をお貸したいのです。

「鹿児島大学の先生に話を聞いてもらったおかげで、自分が直面している課題を解決する道筋が見えた」。そう言ってもらえるような大学にしたい。わたしは、大学に行かなかった学生に「鹿児島大学に救われた」と感謝されるような、そんな大学にしたいのです。

(2)生涯学習教育研究センターに期待すること

鹿児島大学副学長 矢野利明

副学長の立場と個人の立場の両方を交えて話したい。

今の大学の改革論議は、21世紀の国家のあり方とそれに見合った大学との関係でなされています。では、国立大学の改革論議が起きるのはなぜでしょう。次の3つの視点から説明ができます。①日本の高等教育の問題点、②日本経済の活性化、③行政改革と大学改革です。

「国立大学法人化」(独立法人化ではない!)も、大学改革の一環として推進されています。お金は国が出します。したがって、文科省として何を進めるかは汲み取っておくことが必要です。

大学審議会答申(H10)から最終報告(H14)まで繰り返しててくる文言に「個性輝く大学、知の再構築、大学の多様化・個性化、国立大学の構造改革、新しい国立大学の設計、国立大学に期待される使命や機能は何か、国費より支えられる国立大学が果たすべき役割は何か」があります。これらに共通する真意とは何でしょう?大学の序列化ともみえます。

例えば、A)学部、B)修士、C)博士定員を主要国立大学で比較すると東大は、 $B/A=0.82$ 、 $C/A=0.48$ で



あるのに対し、鹿大は、 $B/A=0.20$ 、 $C/A=0.07$ です。 B/A と C/A の数値が高いほど、21世紀COEプログラムの採択件数が多くなっています。教育と研究のバランスをとることが大切であることがわかります。

鹿児島大学は、中期目標として、教育、研究、社会貢献、国際交流の4つの柱を掲げています。では、個性輝く鹿児島大学を目指すうえで、生涯学習教育研究センターの役割はどのようなものなのでしょうか。

まず、生涯学習教育研究センターの教官スタッフに求められる役割は、組織の壁を越えた教育研究システムです。そして、全学構想の中での役割は、鹿児島大学の国際交流の戦略、東南アジアにおける教育拠点形成が一例として挙げられます。生涯学習の対象者は日本人だけではない、ともいえます。

また、学内共同教育研究施設の見直しとして、鹿児島大学サイエンス・フィールド・センター構想における役割に期待があります。生涯学習教育研究センターをセンターの中だけに閉じ込めないでやっていってもらいたい。



夢を語る生涯学習教育研究センター



夢を描くとこんな感じ!?

研究会後の茶話

研究会のあとは、議論で乾いた喉を潤しながら、さらに夢ある語り合いに花が咲きました。当センターの教官から、「センターとしての使命を果たしていく上で、こんな建物があったらいいな〜」という原案をたたき台に、茶話会のメンバーと一緒に、ああでもないこうでもない意見を出し合いながら、センター新築構想の第一次案を練り上げました。



茶話会で練り上げられた第一次案の前に

第3回定例研究会の案内

日時: 2004年3月31日(水) 17:00~19:00

場所: 教育学部 第2講義棟 2階 小会議室#22

テーマ: 「森林を使った生涯学習」 農学部教授 枚田邦宏 農学部助教授 井倉洋二



定例会第3弾は、森林を切り口に農学部の先生方より生涯学習を語って頂きます!



「鹿児島大学の森」で、子どもや大人を対象に創意工夫の企画を実践されています。楽しいお話が伺えます。

ぜひ奮ってご参加ください。研究会のあとは、今回も「茶話会」を開催します!

飲み物と茶菓子は、こちらでご用意いたします。「マイ★コップ」の持参を歓迎しております。



生涯学習教育研究センター ニュースレター No3

2004年3月31日発行



今回の講師の井倉助教授

＜特集＞高隈演習林特別実習

まだ寒さの残る3月上旬、9日～11日（2泊3日）の日程で、農学部附属高隈演習林で実施された「農学部生物生産学特別実習」に当センターの専任教員2人とセンター長が参加させていただきました。今回の「体験」を伴う視察は、本実習の講師である井倉洋二助教授のご好意により実現したのですが、鹿児島大学で実践されている素晴らしい教育を目の当たりにすることができました。実習に参加した学生たちの声を広く届けたいと思い、ニュースレターで特集を組んでみました。

参加した農学部の特別実習とは？

今回参加した特別実習は、農学部生物生産学科の1年生を対象とするもので、2年生で選択する専門領域を決める際の判断材料として準備されているものです。今回参加した高隈演習林実習は、正確には「林学」コースに属するもので、林学は、組織改正により生物生産学科から生物環境学科に移行しています。にもかかわらず、「よい実習だからぜひ学生たちに経験させたい」という生物生産学科の教員の熱い思いから、学科が異なった今も、学生教育の場として当実習を提供しています。

て当実習を提供しています。

参加した学生は、男女あわせて16名（女9：男7）です。2年に進級すれば、それぞれの専門分野に分かれることとなりますが、実習を終えた後のレポートから察するに、各専門に進んだ後にも豊かな人間関係、表現力、感性は、貴重な財産になることでしょう。学生たちがいくつものハードルや課題をこなしていくうちに、みるみる変貌をとげていくさまがとても印象的でした。「森林のそのものに人を育てる力がある」。そんな気持ちの高まりを感じました。

高隈演習林実習のプログラム

2泊3日の日程で学生達が経験したプログラムは実に多様でした。以下、順を追って学生たちといっしょに経験します。

1日目 朝8時半農学部集合

●垂水市にある高隈演習林に向けて出発



●オリエンテーション 高隈演習林の概要や実習の目的が話されました。



部屋を変えてアイスブレイクの自己紹介。各自が呼んで欲しいキャンプネームを入れた名札を作成。

●イニシアティブゲーム（Action Socialized Experience ASE） 人間関係やチームワークを学ぶ

キャンプ地に移動した後、アメリカで開発されたASEプログラムに挑戦しました。グループに与えられた課題をルール の範囲内で考えて克服するアクティビティであり、集団の中でそれぞれが果たす役割を学んでいくことが狙いでした。



ASEを通して自分がこのグループでどんな立場か、何をすべきかなどを考えることができた。まさに社会を反映したゲームだと思ったし、こうやって自分の役割を考えて行動することを普段もやっていかなければならない。(Aさん)

普段の大学生活ではチームで協力して何かをすることや人と触れ合うことなど全くないのでスキミングによって人間関係はこんなに縮まるものかと感心した。(B君)

学習が始まったばかりで緊張していたが、その緊張を自然に解きほぐすことができた。(C君)

学生の声



●1泊目のキャンプ生活と薪を使った食事準備体験 野外生活の技術を学ぶ・仲間と協力する



火のおこしかた、薪の割り方、チームワークを学んだ。1人1人が自分の役割を果たすことで1つのものが出来上がっていった。今まで食べたどの食事よりもおいしく感じられた(Dさん)



●ナイトハイク 夜の自然を五感で味わう

「光のない生活」というものに、私たちは全く無縁の生活をしている。暗やみは不安やおそれを感じさせるが、そこが安全であるということが分ると素晴らしい夜の美しさを感じることができた。(Eさん)

初めてナイトハイクを体験し、多くの動物たちが森の存在を必要としていることがわかった。このような森林が、どんどん減少していることに動物達の存在までも危機感を感じた。(F君)

●キャンプファイアー 火や木の素晴らしさを体験する

静かに火をみつめていると火の美しさや燃える音、暖かさが、その場の雰囲気までも落ちついた暖かいものに変えてくれるように感じた。火を囲んでいるだけで会話を必要とせず、沈黙も苦にならなかった。(B君)



2日目

●森の見学 森づくりと森林の利用や林業について知る

何年、何十年もかけて管理する苦勞。そして、木の安さにおどろいた。あの苦勞にあの値は本当に辛い・・・と思う。(Gさん)

●川の源流体験 川の始まりを見て水の循環を体感する・川の自然を体感する・仲間と協力して進む

浅瀬でも水の勢いが強いと体が流されそうになるので、川を美しいと思うだけでなく、その恐ろしさを理解することができ役立った。(H君)

このような素晴らしい自然を子孫に残していきたいと思ったし、「それを残すために自分に何ができるか」考えさせられました。(F君)



3日目

●懇親会(バーベキュー) 仲間と交流を深める

●林業体験 林業労働を体験し、森づくりの重要性をしる



木を切るのは、他の木や草の日当たりを良くするためというのを聞いて、自然破壊だと思っていた木を切る行為が大切なことなんだと感じた。あんなに木を植えたり、育てたり、切ったりするのは大変なのになんで国産の材木は安いんだろうと残念に思った。(I君)

●自己紹介、毎日のふりかえり(感想発表)・最後の発表

活動をふりかえることにより学びを深める・人の感性や意見から学ぶ・表現力を高める

学生の感想でどの学生も一致していた意見が、この「ふりかえり」でした。アクティビティを終える毎に感想を語り合い、共有する。この経験を通して、「人前で意見を述べることの大切さと難しさ」「自分とは違った感性をもつ人間の意見を聞く面白さ」「自分で考えることの大切さ」「人の意見を聴くことで自分の知識、考え方が深められ、それにより人と感動を共有し、新しい発見や相手を知ることができる」ことを学んでいます。五感をフルに使った双方向の学びを提供するこの実習には、大学の講義だけでは得られない豊かな学びの機会がいたるところに用意されていました。



生涯学習教育研究センター ニュースレター No.4

2004 年 4 月 8 日発行



❀ 第3回研究会の報告 ❀

毎月最後の水曜日の夕方に開催している生涯学習教育研究センターの定例研究会は、3 月 31 日に第 3 回目を迎えました。今回は、大学の演習林を学生だけでなく、市民にも開放し、森林環境教育のフィールドとして全国でも珍しい実践をしていらっしゃる農学部の井倉洋二助教授と枚田邦宏助教授をお招きし、映像や音声を交えながら演習林の取り組みについてお話いただきました。紹介のあったプログラムは、ニュースレター No.3 でも特集しましたので、本紙とあわせてご覧いただければと思います。

当日は、学生向けの実習の紹介の他に、県内の指導者養成や子ども対象の多様なプログラムも披露されました。報告の後は、参加者と一緒に演習林の将来構想や学部を越えた教育研究の可能性にまで話題は広がり、当センターの使命を改めて感じさせられる研究会となりました。



左がゲストの枚田氏、右が井倉氏

「森林を使った生涯学習」

(1) 演習林の概説と学外向けプログラム

井倉洋二助教授

演習林を所有する大学は全国で 27 大学。そのうち鹿児島大学が所有する面積は全国第 5 位。3062 ヘクタールにおよび、鹿児島大学の敷地面積の実に 93%が演習林です。



もともとは、大学の資産という位置づけで、林学、林産学に関する教育研究のために活用されてきましたが、近年、大学の附属施設の見直しの中で、演習

林のより有効な活用方法が話題となっています。鹿児島大学農学部附属高限演習林では、現在〈大学の演習林の中でキャンプをし、森に親しむ機会を提供する〉という一連の企画を年間通して企画していますが、もとはといえば、文部科学省から要請があった「大学等地域開放特別事業」（1999 年）の一環として、重い腰をあげたにすぎませんでした。ところが、じっさいにやってみると思いのほか好評で、いまでは一般の小学生を対象としたプログラムや小学校の総合学習の授業だけでなく、学校教員や大学生向け指導者養成プログラムにまで広がってきました。

(2) 森林教育の学内向けプログラム

枚田邦宏助教授

演習林をつかった森林教育プログラムは、1 年生を中心にした導入教育として始まりました。その背景には、林学の専門コースに配属する学生の多くが森林のことを知らない、演習で刃物が使えない、といった状況がありました。毎年、試行錯誤しながらプログラムを改良し、現在に至っています。プログラムの評価については、詳細なアンケート方式で学生から直接フィードバックを受けています。そのアンケートの集計結果によると、本プログラムの実施効果は 8 割の学生から支持を得ており、教育効果については、「人間関係づくり」と「思考と表現能力の養成」に達成度が高く、逆に「森林の知識と感覚の養成」は二の次になっていることがわかります。当初は、専門課程前の導入教育として始めたプログラムでしたが、全学の学生向けの教育（共通教育）プログラムとしての意義が大きいことがわかってきました。この企画は、教育学部の先生と協力していますが、鹿児島大学の他の教員と協力することで「森林のもつ教育力」を生かした企画はもっと広がりがもてると思います。



「大学の森は宝の山」は真実だった!

次は、研究会の参加者の感想です...

●〈森林環境教育のフィールドとして大学の演習林を活用する〉という、こうした鹿児島大学農学部演習林の取り組みは、全国でも数少ない先進的な取り組みです。お二人は翌日、東京で開催される日本林学会でこの内容を報告されたとのこと。どういう反応があったのか、わたしたちとしても気になるところです。

●キャンプに参加した学生に尋ねてみると、意外にも「人間関係が深まった」などの側面についての自己評価が高いとのこと。これは、ひとつひとつの活動が終わるごとに、その場で小グループになって話し合いをさせ、ほかのグループの人たちの前で発表させるなど、カリキュラム上の配慮がきめ細かくなされていたからでしょう。しかしそれにしても、森林の中で実際に体を動かしてみなくては伝えるべき感動もありますし、お互いに発見したことを発表する気にもなります。「人間関係の深まり」という点ひとつとってみても、森という豊かなフィールドに支えられて、はじめて可能になったというべきでしょう。「森林の教育力」というのは、こういうことなんだろうね。

●「こういうキャンプをたくさん企画、実施していて、研究者として大丈夫なのか？」というスルドイ(?)質問

もありましたが、「ほかの大学でもあまりやっていないような演習林でのキャンプが、どうしてこんなに広がってしまったのか?—それは、なによりわたしが好きだからです。参加者のみなさんが感動するのを見れば、やっぱり続けないわけにはいきません」という明解なお答えでした。

●従来の研究枠組の中には収まらないかもしれない。しかし、市民に直接に喜んでもらえるような新しい企画、新しい研究のテーマを追求している方が、ほかにもたくさんいるにちがいない。そういう研究者を大学の中で孤立させず、広くし宣伝して応援していきたい。その努力が大学の中でも正当に評価されるシステムを作りたい...。生涯学習教育研究センターの使命を改めて感じさせられた報告でした。そういうわけで、これからも、大学の中で市民を対象とした意欲的な取り組みをされている方がたを定例研究会にお招きして、報告していただくつもりです。



報告に聞き入る参加者



映し出されたHP画面

第3回茶話会

今回の茶話会では、当センターが教育学部美術学科の学生の助けを借りて、準備を進めているホームページのお披露がありました!これまでよく耳にした先生方の声は、「自慢の講座を企画しても、宣伝が下手でなかなか人が集まらない」ということでした。センターとしてなんとか広告塔になれないかと、まずはHPに着手しています。「市民の方にわかりやすい表現方法は?」といった作成中の悩みをぶつけながら、貴重なアドバイスやアイデアを頂くことができました。あわせて、センターの協力員を設置する可能性など、実際にフィールドをもって取り組まれている先生方のニーズを伺うといった気さくな情報交換の機会となりました。

第4回定例研究会の案内

日時: 2004年4月27日(火) 17:00~19:00

場所: 教育学部 第2講義棟 2階 小会議室#22

内容: 「大学の財政と社会人教育」 鹿児島大学経理部長 通山正年氏

「社会人教育を学生教育とあわせて大学の本務とする」ことが、文部科学省も強調する大学を巡る趨勢となっております。鹿児島大学もいよいよ4月1日より国立大学法人となりました。大学の自由裁量が増え、いろいろな可能性をもちながらもシビアな財政問題も私たちにとって身近な問題となって参ります。そこで、第4回は、大学の経理を預かる経理部長をお招きし、公開講座や公開講義など社会人教育を切り口に、大学のお金の流れについて議論をしたいと思います。

研究会の後に「茶話会」を予定しております。出入りは自由ですのでお気軽にご参加ください。



生涯学習教育研究センター ニュースレター No5

2004 年 5 月 20 日発行



❀ 国立大学法人化と大学の財政—第4回研究会の報告— ❀



ゲストの通山経理部長

生涯学習教育研究センターでは、これまで4回の定例研究会を開催してきましたが、去る4月27日(火)が、鹿児島大学が国立大学法人になって初めての研究会となりました。国立大学法人化といっても、一教員でさえ何がどう変わるのか、なかなか認識できないのが現状です。そこでこの日は、鹿児島大学経理部長の通山正年氏を講師にお招きし、国立大学法人後の大学の財政について、現状から今後の見通しまで、充実した資料をもとにご説明いただきました。＜国立大学法人化の意味は、財政問題の解決を大学に預けたところにある＞と通山氏が指摘するように、大学財政の厳しい状況を知れば知るほど、創意工夫が大学として求められていることを痛感します。



通山部長には勤務時間を過ぎてから無理言ってご報告して頂き、夜9時ごろまで茶話会にまでお付き合い頂きました。当日は珍しくアルコールなし、センパイ2～3枚の「もてなし」でした。悪かったかなあ…。

当日は、参加者から次々と質問が出され、大学財政の基本的なことから今後の可能性まで、従来になく重々しい雰囲気の中、真剣な議論が行われました。センターとしても、今後、国立大学法人の業務の柱にある「公開講座の開設その他の学生以外の者に対する学習の機会を提供すること(国立大学法人法第22条第4項)」に関して、＜大学が実施する社会人教育の意味＞を問いながら、創意工夫を重ねていきたいと考えています。

「6年後の評価が大学の分かれ目」

通山正年財務部長

鹿児島大学には、1年半前に富山大学より赴任しました。それ以前は、九州、宮崎、栃木大学などでやはり経理を担当、先の富山大学では、「社会人」に大学の講義を開放する「オープン・クラス」に携わりました。国立大学法人化で事務職員も文部科学大臣の任命を離れ、大学の職員として本職を得ることになりました。

鹿児島大学の位置を全国立大学の中で見てみると、国からの出資財産額は89大学中第18位で1485億円(台帳価格)。主に土地と建物の価格を反映し、郡元の土地代が全体の半分を占めます。一方、14年度の決算額をみると全国第19位であり、今年4月から始まった「国立大学法人運営費交付金」の額も第19位。大学の規模を交付金はそのまま反映しているとみなすことができます。

国立大学法人になる以前は、大学運営に必要な諸経費は、文部科学省(以下、文科省)から機械的に積算された支出額として大学に直接支払われ、一方、大学で得た収入は、そのまま文科省に納める仕組みでした。この仕組みでは、国が経営に直接責任を負い、大学には経営責任はあり

ませんでした。国立大学法人化は、大学の経営責任を国から各大学に移すことを意味します。

そこで、今後鹿児島大学は、自己収入(入学科や授業料等)と国が交付する「国立大学法人運営費交付金」の合算を収入の部とし、事業を進めていくことになります。国立大学法人への移行に当たり文科省は、決済額にかかわらず6年間は、「運営費交付金」を一律に支払うことを決めています。現在、どの国立大学法人も、6年後を見越した中長期計画を立てておりますが、その6年後の評価が、それ以降の運営費交付金の額を左右すると考えられています。

文科省では、「国立大学運営費交付金」のほかに「特別研究経費」という枠を準備し、各大学の個性に応じた取り組みに対し、「教育研究施設の新設」「教育研究事業費」「教育研究設備費」「研究教育環境充実費」を支出することで、教育研究の活性化を支援しようとしています。いずれにしろ、今後は、鹿児島大学として収支のバランスを考えた経営をしていかなくてはなりません。(文責：小栗)



公開講座の何が問題？

公開講座制度の見直し

生涯学習教育研究センター 松野修

大学の財政はそうとうキビシイです。定例研究会で通山財務部長から、大学の厳しい財政事情について説明をお聞きしたあと、公開講座の運営についていろいろ考えてみました。

平成16年度に関しては、公開講座に500万の予算がついており、現在のところ次のような作業手順ができつつあります。(1)各講座の担当者から上がってきた企画(Aタイプ)をとりまとめ、(2)研究協力課が文部科学省の旧査定基準にもとづいて講師料などの精査をする。(3)これをもとに各企画に対し(一律に減額して)予算を配分する。(4)公開講座の参加費収入は大学全体の収入とする。この際、配分された予算よりも収入が多かろうと少なかろうと予算とは関係なく扱う。なおこの手続きは、(2)(3)を文科省から研究協力課に移したまでであって、昨年度までの制度を限りなく踏襲したものとなっています。

黒字になっても担当者にメリットはない

「公開講座に500万の予算が組まれている」といっても、実際にところは公開講座のために自由に使えるわけではなく、現状では「公開講座では500万の支出をし、500万以上の収入をあげよ」という逃れ難い達成目標にしかなくなっていません。しかも講座を企画する段階で「収入と支出が見合うように計画してほしい」と当センターが指示しているために、〈支出に見合った収入が予め明らかに見込めない企画〉は、はじめから提案すらできないのが現状です。しかも徴収する参加費についても、文科省の旧基準を準用しているために、公開講座の企画そのものも硬直化させて

います。

ところがいっぽうでは、各企画に対する〈予算の配分と実施後の収入の関係〉についてみると、収入と支出が見合わなかった場合について、従来は原則的に調整はなされてきませんでした。担当者の努力によって参加者が予想を上回って黒字が出たばあいでも、担当者自身にもたらされる利益は、正直なところ直接にはなにもありません。これでは担当者のモチベーションを継続的に高めることはできないでしょう。

つまり現在の制度では、公開講座の企画をたてる条件をきわめて狭く限定して、公開講座を開催したいと思っている研究者の潜在的な意欲をあらかじめ排除してしまっているうえに、このむづかしい条件をかいくぐって講座を実施した当の担当者には、その成果について関心をもてなくさせ、講座を継続的に発展させようとする意欲を奪う結果になっています。

公開講座は、誰の、なにのために？

公開講座は市民のために、大学の知を公開し、市民を対象とした生涯学習の機会を提供し、もって地域社会に貢献することを目的とするものです。公開講座の担当者は、講座の内容がよければ、市民から直接に「有意義な講座でした」、「また、ぜひやってください」という声を聞くことはできます。しかしそうした声援も、財政的な保証がしっかりととなされ、大学内での評価がともなわない限り、一職員として継続的に実施していく気持ちにはなれないでしょう。学生を対象とする講義とちがって、公開講座のばあいは特に入念な準備が必要になりますし、そのための基礎的な研究も求められます。また、そうでなければ質の高い講座をすることはできないのではないのでしょうか。

公開講座の運営について改善すべきが山積しています。今年度その問題点を徹底的に洗い出し、来年度からの改革につなげなくてはと思っています。 By Mastuno



第5回定例研究会の案内

日時：2004年6月1日(火) 17:00～19:00

場所：教育学部 第2講義棟 2階 小会議室#22

内容：「エネルギー教育と地域づくり」工学部教授 門 義久氏

京都府八木町のバイオマス発電の研究調査や地元「鹿児島大学エネルギー教育研究会」の活動など、地道に活動を積んでおられる先生から、鹿児島のバイオマス発電による地域づくりの可能性と鹿児島大学の役割について提起していただきます。



研究会の後に「茶話会」を予定しております。出入りは自由ですのでお気軽にご参加ください。





生涯学習教育研究センター ニュースレター No.6

2004 年 6 月 25 日発行



❀ 学外からも初参加！地域課題を考える—第5回研究会の報告— ❀

当センターの定例研究会は、これまで学内の課題を主に扱ってきましたが、第5回目となった今回、初めて具体的



ゲストの門久義教授

な地域課題を考える学際的な議論がなされました。先生方の便宜を考え、毎月最後の水曜日に定例化を努めている研究会ですが、今回は変則的でした。月初めの6月1日（火）に工学部機械工学科の門久義教授より「エネルギー教育と地域づくり活動」と題し、二本立ての報告をいただきました。前半が、2003年度生涯学習教育研究センターの年報にもご投稿いただいた「鹿児島大学エネルギー教育研究会の活動」について、後半が「京都府八木町のバイオマスエコロジーセンター」に関するものでした。

変則的な日程にもかかわらず当日は、鹿児島大学エネルギー教育研究会メンバーの教育学部の先生方やボランティアとしてかかわる学生さん、バイオマス発電に関心をもたれている金属工業団地の方、理学部のほか、農業経済や環境経済学を専門にする先生方も参加され、特に鹿児島県のバイオマス発電の可能性について議論が集中しました。畜産県の鹿児島では、とりわけ糞尿処理問題が深刻であり、バイオマス発電は一つの解決策として可能性をもちつつ、技術面だけでなく社会的システムとしての課題を多く抱えています。「地域の自立発展」を理念に掲げる当センターとしても、今後地域課題の解決に応えられる学際的な研究プロジェクトが、この定例研究会から立ち上がることを期待しています。

「エネルギー教育と地域づくり活動」

工学部教授 門 久義氏

専門は、機械工学、エネルギー関係です。現在、鹿児島大学エネルギー教育研究会（以下、研究会）のまとめ役をしていますが、この会のそもそもの発足は、平成14年「地域におけるエネルギー教育の研究拠点の構築と、地域の特色を生かしたエネルギー教育に関する実践的な研究を支援すること」を目的としたエネルギー教育調査普及事業（経済産業省自然エネルギー庁による（財）社会経済生産本部・エネルギー環境教育情報センターへの委託）に応募するのがきっかけとなっています。

鹿児島大学は、全国14の地域拠点大学の一つに採用されることになり、同研究会では「鹿児島県をフィールドとしたエネルギー教育の調査・研究プロジェクト」を研究テーマに三ヶ年の活動計画を立てました。これまで主に次に挙げる6つ活動をおこなってきました。（1）生徒・学生向けエネルギー施設見学の実施と意識調査、（2）エネルギー&ものづくり教室、（3）学外機関との連携、（4）エネルギー教育の実態調査、（5）エネルギー教育教員研修、（6）エネルギー教育の試行、です。

現在研究会のメンバーは、鹿児島大学の教員（工学部・教育学部・生涯学習教育研究センター）のほか、学校

の先生（大学附属小・中の理科教諭、鹿児島県小・中・高の教育研究会理科部会委員）、行政（鹿児島県企画課職員、鹿児島市・鹿屋市企画課職員）、企業（九州電力・日本ガス他）、民間研究機関（環境エネルギー総合研究所）、市民（かごしま市民環境会議）となっています。

鹿児島大学の取り組みは、他の地域拠点大学に比べて活動が活発との評価を得ており、特に昨年度実施した教員を対象にした研修は鹿児島大学だけでした。研究会が産・官・学・民によって構成されているのも特徴です。

今年は、事業の最終年度にあたりますが、今後の活動としては、エネルギー実験教材の開発、関連データの収集と提供、教育の支援、教員間の情報交換の場の提供（他の教科との先生間、学校間）などに取り組んでいく必要があると考えています。

学外・教員・学生が集った研究会



学生ボランティア を組織したい

生涯学習教育研究センター 松野

◎「なにをしていいのかわからない」

先日、講義のあと、こんな感想を書いてくれた学生がいました。

「最後に先生がお話された〈若者には夢があるというのが残酷だ〉というのは共感できました。ぼくはぜんぜん夢も、やる気も、生きる気力もありません。かといって死ぬ度胸もありません。〈生きたくはないけど、死にたくもない〉、そんな感じです。やりたいこともなし、とても苦しいです。」

「大学に入ったとたん自分のやりたいことに自信がなくなって、何をしたいのか分からなくなってしまいました。周りの人はやりたいことを分かっている、自分だけが取り残されている気分です。」

わたしも学部時代には、自分でもなにをやりたいのはわからなくて、ずいぶん辛い青春を送りましたから（ホントです）、こういう気持ち、よくわかります。

◎ボランティア活動が自信を

とりもどさせる（こともある）

ところで、昨年8月に鹿児島大学で開催された〈エネルギー&ものづくり教室〉では、今回発表していただいたとおり、300人近くの小中学生の参加があり、しかも参加者の9割近くが「予想以上に楽しかった」、「予想通り楽し



茶話会では、センターの専任教員松野氏の科学教育グッズが披露されました。（巨大原子模型…）

グッズはまだあります。乞う御期待！

かった」と答えています。大成功といっていいいでしょう。発表後の茶話会でも話のあったとおり、これは多くの学生ボランティアに支えられて、はじめて得られて成果です。このほか、ここ数年県内各地で開催されている〈科学の祭典〉も、毎回数千人の参加者を集めています。そこでも鹿児島大学はじめ、各大学の学生たちが各ブースでの発表や会場整理などのために活躍しています。

「大学に入学したけど、何をしたいかわからない」という学生たちにとって、とりあえず「何か人の役にたつことができた」、「自分たちが準備したり教えたりしたことで、みんなに喜んでもらうことができた」という、ただそれだけのこと（?!）が、深い喜びをもたらし、自信をとりもどさせることがあります。小さい子どもたちは表情が豊かですからねえ。こういうボランティア活動がキッカケになって、自分の進むべき道をはっきりと方向づけできるようになった学生を、わたしは今まで何人も見てきました。

◎これも重要課題

ただし現状では、イベントごとに学生のボランティアを募っていて、イベントが終われば解散してしまっているようです。ですから、ボランティア活動を継続的に積み上げ、リーダーが育っていくような組織にまでもっていけたらいいな—と考えています。生涯学習研究センターでも、学生ボランティアを任命できる制度を検討しています。学内にはわたしたちが知らないだけで、継続的に活動している学生サークルがあるのですが、まだ把握できていません。学生ボランティアの組織化は、当センターのこれからの重要な課題です。

By Mastuno



第6回定例研究会の案内

日時：2004年6月30日（水） 17:00～19:00

場所：教育学部 第2講義棟 2階 小会議室#22

内容：「総合研究博物館と生涯学習」

総合研究博物館 大木公君 教授

鹿児島大学総合研究博物館の常設展がこのほど開設しました。常設展の立ち上げに至るエピソードを伺いながら、実際大木氏に常設展を案内してもらいます。

並べるのに3日かかったという日本最多数の金鉱石、巨大アンモナイトなど見所たくさん。当日は、まずセンターにお集まりください。お話の後、軽くお茶休憩したのちにツアーに繰り出します。





生涯学習教育研究センター ニュースレター No.7

2004 年 7 月 16 日発行



❀ 大学の宝の山がどんどん消えていく・・・ ー第6回研究会の報告ー ❀

去る 6 月 30 日（水）午後 5 時からいつもの教室で第 6 回定例研究会がスタート。今回のゲストは、総合研究博物館の大木公彦教授。総合博物館の使命を熱く語る大木氏の魅力に、参加者一同すっかり虜となり、熱気に包まれた研究会となりました。「総合研究博物館と生涯学習」と題する今回の報告では、日本の総合研究博物館のお粗末な事情を知ると同時に、本学の総合研究博物館が欧米のように本来の使命を全うできれば、鹿児島大学は世界に誇れる存在になりうることを知りました。総合研究博物館は、大学の教育研究の蓄積を地域社会に体系的に還元する窓口でもあり、生涯学習の視点からも活用が期待されます。しかし、現実には人材・施設等条件が不十分で課題も多い。



金鉱石について解説する大木氏

会の後半は、常設展を案内していただきましたが、わずかなスペースに凝縮された時代とドラマ。専門家ならではの技。条件不備のため、本学博物館で学芸員資格のコースがないことは、学生教育の点からみても今後の大きな課題でしょう。

「総合研究博物館と生涯学習」

総合研究博物館 教授 大木公彦氏

大学に博物館があるのは海外では当たり前ですが、日本では 1996 年になるまで、国立の大学には一つもありませんでした。大学教員が残した遺伝子やバイオ製品が、退職と同時に捨てられている現実、文部省が初めて危機感を抱き、1996 年に始めて東京大学（646 万点・教員 9 名）に設立されました。



その後、京都、東北、北海道、名古屋、九州大学と旧帝大が続き、新制大学としては鹿児島大学が初めて 7 番目に登場。2002 年に大阪大学に設立されてその後は打ち止めとなっていました。その理由

は、標本の数が 100 万点以上と文科省が設立条件を厳しくしたからと考えられます。

このように鹿児島大学は、全国の国立大学（現国立大学法人）の中でも珍しく総合研究博物館が設置されている大学です。その標本数も大阪大学の 2 倍以上で 135 万点。しかし、最大の問題点は、標本を所蔵する所蔵庫がないため、大学の各建物に点々とある標本の多くが、すでにかなり傷み始めています。例えば、水産学部の標本のほとんど干からび始めており、こうなると DNA も危ないのです。

大学博物館の最大の使命は、大学で教育研究に使用された標本・資料を保管し、これらを情報公開することであり、大学教員の研究内容を一般国民へ紹介することです。

例えばある学会では、研究し記載した新種を学会誌に投稿する際、その標本を博物館へ保管し、その登録番号を論文に明記することを義務付けています。日本では多くの模式標本が、その研究者の退職とともに失われたり、標本の保管が不十分であるため、外国の研究者から標本の送付を求められても、新種にした標本と比較できないことが多いのです。それを未然に防ぐ策と考えられます。

標本の失われた論文は、その標本の記載が正しいのかどうか分からず、その論文の価値さえ失われてしまいます。その危険性を回避するために、標本収蔵スペースもなく忙しい研究者に代わって、標本を保管し、内外の研究者のニーズに応えるのが博物館です。博物館が保管するものは標本だけではなく、貴重な研究資料も保管の対象です。

図書館が書籍・論文・資料を中心に保管し、広く活用されていることにに対し、博物館は、様々な研究を行なう過程で使用した器材や蓄積された図表類・データなどを含め、研究結果を有機的に繋ぎ、意味付けをして、一般国民にわかりやすく紹介していく使命をもっております（図書館も書籍を中心ですが、同様な使命を持っています）。

大学博物館が、ほかの博物館と異なる点は、「大学」で教育・研究を行なう過程で蓄積された知的財産を管理し、情報公開することにあるのです。

鹿児島大学の信頼性のために 奮闘する総合研究博物館

生涯学習教育研究センター 松野 修

貴重な標本がゴミに？！

いや～、とてもエネルギーなお話でした。2時間とぎれることなく熱弁を振るい、あまりの熱にスライド投影機がダウンしても、修理のかたわら話をつづけ、質問



スライドの復旧に励むが・・・

に答えられる姿に圧倒されました。おかげで、文系のこのわたしにも大学博物館の意義がようやくわかってきました。

たとえば、旧家の土蔵から出てきた貴重な古文書を大学で預かれば、必ず附属図書館で保管し、必要なあいにはいつでも公開できるよう厳重に管理します。しかし科学研究の基礎となる標本類は、なんと驚いたことに、研究者が退官すれば、極端なはなし、どんな貴重なものでもゴミとして廃棄されてしまうことだってありえるとのこと。それというのも、大学の附属図書館のような働きをする大学博物館が、ほとんど設置されていないからです。

いうまでもなく、鹿児島大学には附属総合研究博物館があります。しかし、じっさいには「欧米諸国の立派な大学

博物館に比べれば、とうてい足下にもおよばない」と、スライドを見せながらお話をくださいました。いや、鹿児島大学の博物館がみずぼらしいだけではありません。旧帝大の博物館も、同じようなものだそうです。先進諸国の大学では「基礎資料となる標本類は大学の附属博物館が管理する」というシステムが古くからできあがっています。そういうシステムを構築することによって論文の信憑性を保証し、科学認識の公共性を確保しているわけです。

現代日本の恥なるゝ

「鹿児島大学に標本の照会依頼があっても、どこにあるかわかりませんという返事」、「日本からは借りるだけ借りておいて、海外からの依頼には応じられない」というのはまさに国辱モノです。「わが鹿児島大学に附属博物館があるかぎり、こういう事態は招きたくない」——こうして大木さんの話は、かぎりなく熱くつづくのでした。

教室でのお話のあと、じっさいに展示を見ながら説明をしていただきました。じつは常設展示場がオープンしてからすぐ、センターのスタッフ3人で展示室を訪問したのですが、そのときは、展示の意図や標本の価値はよくわかりませんでした。しかし大木さんの話を伺って、その真価がおぼろげながらわかってきました。またゆっくりお話を伺いたいです。

総合博物館と生涯学習教育研究センターとは、これからのいろんな接点で協力していけそうです。そういうことを書こうと思ったのですが、どうやら大木さんの仕事への情熱と、事態の深刻さに方向を見失いました。

By Mastune



今回のゲストは、外務省の第一線で途上国とわが国の教育協力に取り組む横林氏です。横林氏は、今回「外交講座（学生対象の授業）」のために鹿児島大学にみえますが、氏のご好意で教員との座談会を開くことができませんでした。

鹿児島大学では昨年の暮れ、ベトナムに代表団が派遣され、ベトナム教育養成省のみならず、ハノイ外国語師範大

第7回定例研究会の案内

日時：2004年7月28日(水) 15:00～16:30

場所：教育学部 第2講義棟 2階 小会議室#22

内容：「鹿児島大学と国際交流 —日本のODAと教育協力の課題と展望から」

外務省 経済協力局 横林直樹氏

学など複数の大学関係者から、「ぜひベトナムに鹿児島大学の分校を…」との要請がありました。この訪問は、当センターが企画し

たものですが、今回改めて横林氏を囲んで、途上国における教育の現状や政府の教育協力の動向について理解しながら、鹿児島大学のベトナム分校を始め、鹿児島大学の今後の国際交流のあり方について議論したいと思います。

いつもより開始時刻が早いです。ご注意ください。



生涯学習教育研究センター ニュースレター No.8

2004年8月9日発行



❀ 外務省の第一線で活躍する横林氏来たる ❀

去る7月28日、外務省経済協力局・調査計画課の横林直樹氏が、「外交講座」の講師として当センターを訪れました。

「外交講座」は、大学側の要望に応じて講師を派遣する外務省の事業で、原則各大学1回。鹿児島大学からは、当センターの専任教員である小栗有子が応募した「日本のODAと教育協力の今後との課題と展望」が採用され、前期の試験期間中に全学部生対象に実施されました。

当日は、教育学部の大講義室に立見ができる盛況ぶりで、新聞の広報を見て参加された社会人の方もいました。横林氏の具体的な話に学生たちの質問が殺到。外務省の仕事に関心をもつ学生と対談する時間もつくっていただき、グローバルな視点から「私」を見つめなおす機会になったようです。鹿大の先生方との交流も当センターの定例研究会を通して実現し、外務省と大学のこれからの連携の可能性について語り合うことができました。



「大学は十数年振り」と語る横林氏。学生の問題意識の高さに驚いていました。

外交講座

「日本のODAと教育協力の現状と課題」

外務省経済協力局調査計画課 横林直樹氏

私は、90年に外務省に入省、91～93年にスペインに留学、エルサルバドルでの勤務を経て98年に帰国して以来、教育に関わる経済協力に一貫して携わってきました。途上国の教育・保健・医療・ジェンダーに関する援助政策の企画・立案や、国際会議への対応を担当しています。今日は途上国の教育の現状と問題、具体的事例、そして問題の所在についてお話したいと思います。

まず、途上国の子どもたちの声に耳を傾けてください。「教室は生徒であふれかえり、本、ノート、鉛筆を買う余裕もなく、兄と姉はお金がないため学校をやめてしまった。(タンザニア)」「学校に戻りたいけど戻れない。(インド)」世界では現在8億6200万人が非識字者です。未就学児童は1億1540万人です。地域別・国別比較の統計をご覧ください。就学率はサハラ以南アフリカが最も低く、特に男性に対して女性の就学率が低い現状があります。

日本は主に、学校建設・女子教育・学校給食支援を行っています。教育はそれぞれの国の文化や伝統と深く関わっているため、上から押しつけるような施策は出来ません。従って、主に教育のソフトに関わらないハード面の援助をしています。日本のODAで、約150万人(アフリカ72万人、アジア78万人)が学校に通えるようになりました。

内戦後のアフガニスタンでは、ユニセフ主導で Back to

school” キャンペーン(子どもたちを学校に帰す運動)で日本政府は500万ドル、日本ユネスコ協会は700万ドルを

供与しました。アフガニスタンの女性教師を日本へ呼んで、研修を行うこともしています。

途上国では、親が学校のメリットを認めず、子どもを学校にはやらせず、働かせることが多いのです。そこで、ニカラグアでは、給食(牛乳の配



布)を提供することで出席率を上昇させたり、コートジボアールでも、お米を子どもたちに配る試みをしています。

途上国は、次の要因によって子どもに教育を受けさせることが困難です。①国の税入が安定でないため学校の維持・運営ができない②特に女の子は、家事(弟妹の世話・長距離の水くみ)をしなければならない③親の側に学校に行かせることで状況が変わる(収入の増加・貧困の克服)という動機をもたない。④訓練を受けた教師がいない。⑤給料・地位とも低く教員のなり手がなく教員が足りない。

皆さんに途上国の現状をもっと知って欲しい。日本では、学校に行って自己実現をしたい、夢を叶えたい、と思えばそれができる。途上国ではそれができない。学校に行ける・行けたということがいかに幸せか自覚して欲しいです。そして、途上国の子どもたちにどう手を差し伸べられるか考えて頂きたいと思います。

学生たちの声



● 話が魅力的で楽しめた。今回のように現場の人の生の声を聞くと話の内容を想像しやすい。このような講座がまたあれば是非きたい。(できればテスト期間外に)(工Oさん)

● あっという間の1時間でした。新しく知った事実、知っていた事実もありましたが、ショックを受ける事実もたくさんありました。これから私達が何をどうとらえ、考え、行動に移すべきなのか、大変考えさせられました。特に教育の価値を見出せないという事実は大変悲しく思いました。(理学部Fさん)

● 今の日本の教育においても「教育の価値を見出せない」部分があるのではと考えました。もちろん途上国に比べて状況は良いわけですが、精神的なところで希望の無い子ども達というのがふえているのではないかと

それが様々な問題としてあらわれてきているのではないかと思います。

(農Aさん)

● 私は普段今の講義室のこの場所に座り何かを学んでいることに何の疑問も何の目的も感じていないことが多い。しいて言うならば社会人としてこの日本社会で生きていくためのちょっとした知識を自分の中に吸収しておこうということだろうか。外務省の生の発展途上国の教育の話聞いて、自分がこの日本に生まれ、この教育を受けている立場にいることを幸せだと感じた。外務省やJICA、青年海外協力隊などの直接の協力はできないが自分なりにきちんとした理解につながったと思う。(水産Uさん)



アフガニスタンの少女たち

● 途上国の子ども達の声は、自分は勉強をしたいというもので、日本の学生はというと「何で勉強しないといけないのか」とすぐ文句を言います。途上国の子ども達はよりよい

生活のため

に勉強をしたいと思っています。

日本の学生(自分も含めて)は、自分の恵まれた状況に安住し、今のままでよいと、勉強に熱心になれないのではないかと思います。世界の状況を知ること自分の位置というものを知り周囲にあふれた問題に目を向け自分ができることを探し、問題解決のための勉強が出来るようになるのかもしれないと感じました。(農Iさん)

● 「学校へ行きたいけど行けない」なんて日本の子供達の口からは絶対出ないですよ。『なんで学校いかなきゃなんないの!』っていついていくくらいですから…。教育を受けられるとはとても幸せな事なのに、そう思えないのは残念なとても事です。日本では当たりまえになっている生活はある国では考えられない位ぜいたくなものなんですね。国の貧富の差を改めて痛感しました。他にも、戦争やエイズなどの要因で学校へ来られないこともあるようですね。女の子だからダメとかも…。かわいそうですが、じゃあ私達は何をしたらいいのでしょうか?何をしたらそんな人達、国を救えるのですか?誰か教えて下さい。(水産Tさん)



第7回定例研究会 毎月当センターが企画する研究会に横林氏がゲストで登場!

学生向けの話と異なり研究会では、文科省の国際協力政策室と外務省との連携事業や、教育協力の中でも特に高等教育分野に関してお話いただきました。政府は今後5年間で、教育分野へのODAを2500億円以上実施します。そして、日本もアメリカを習い、コンサルタントに代わって大学がプロジェクトに参加する方向で今動いています。出席の先生方からは、教員養成の立場から学生が実際途上国に行って貢献する制度づくりの可能性や、鹿児島大学の国際交流戦略として今後政府にプロポーザルを出していく際のノウハウを問う質問などが相次ぎました。教育分野における大学との連携は始まったばかり。鹿児島大学としても何が貢献できるのか、議論を今後とも継続することの大切さを意識する研究会でした。



生涯学習教育研究センター ニュースレター No.9

2004 年 8 月 30 日発行



❀ 鹿児島大学公開授業が始まります！ ❀

大学の講義を広く市民に開放するために公開授業をはじめます。この公開授業は、地域の教育要求に応えることだけが狙いではありません。大学の講義に豊かな社会経験をもった市民が参加すれば、青年学生にとっても大いに励みになることでしょう。わたしたち教員も、受講者から知的刺激を受けられるものと、楽しみにしています。

今回は初めての試みということもあって、うまく軌道に乗るかどう（ほんとはかなり）心配していましたが、のべ70コマ前後の講義について「開放してもよい」とのオファーがありました。ありがとうございました。公開授業の受講申込み者は現在のところのべ36名。これもわたしたちの予想を上回りました。この公開講座が、これからの大学を変えるためのひとつのきっかけになってくれるものと信じています。「公開授業」を大切に育てていきたいと思います。



学生が市民と共に学ぶ公開授業

生涯学習教育研究センター長 神田嘉延

2004 年後期の講義から試行的に市民と共に学ぶ公開授業を開講することになりました。鹿児島大学の公開授業は、各学部等が開講している正規の授業を、教員の申請に基づき市民に開放するものです。開放する講義の時間数は、担当の教員の判断により設定されます。公開授業は、受講生に単位を認定するものではありませんので、上限は単位認定など試験等を除く時間です。公開授業は、安価に設定できる公開講座に準ずる受講料のみで、単位を必要とする科目履修生よりも低額で大学の講義が受けられる制度です。

市民に開放している大学の講義は、滋賀大学が平成9年度からはじめたのを契機に、全国の国立大学にひろがりました。九州では、熊本大学、大分大学、琉球大学ですでに実施されています。富山大学や信州大学などでは、原則的にすべての授業を市民に開放していますが、多くの大学では教員の申請によって市民への開放講義を設定しています。公開授業の募集定員は、学生の授業に支障をきたさない範囲で若干名となっているところが多く、鹿児島大学でも募集の定員は若干名としました。

公開授業のメリットはどこに？

公開授業は、通常の公開講座と異なり、新規に講座を企画して立ち上げることなく、大学の専門的な講義内容が保障されます。多様で高度な市民の学習ニーズに合わせて、

きめ細かく独自の公開講座を企画することは重要ですが、参加者の人数確保が難しくなります。少人数でも市民の高度な学習ニーズに対応できる方策として、正規の講義を開放していくことが各大学で実施されはじめたのです。市民が正規の講義についていけるかどうかは、市民の判断にまかせ、市民の参加によって講義の進行に支障がないようにしていくのが大学の公開授業の前提です。講義の進行は、学生に合わせて進めていくべきものです。大学は、市民にシラバスと講義の難易度を明示し、市民の自己判断で講義に臨めるよう用意します。公開授業を契機に、科目等の履修や社会学生へとつながっていけばと思います。

一方、市民とともに学ぶ公開授業は、青年学生にとっても学習効果が期待されるところ大です。講義によっては、市民の職業や社会的体験を生かした討議も可能であり、学生が市民の学習意欲に啓発されます。市民と共に学ぶことによって、青年学生自身も、講義に対する学習的な緊張関係が生まれてくるでしょう。

また、青年学生と市民では講義に対する評価も異なります。教育改善における職業や社会体験という異なった視点からの参考意見を吸収することができ、青年学生のキャリア教育との授業改善に役にたつと考えます。

公開授業の先発の福島大学では、受講した市民にアンケートをとっていますが、多くの場合、市民が公開講義を受けてついていけないという問題は生じていないようです。市民学歴が高度しているなかで、大学の講義を受けてみたいという市民は増えている状況です。

公開授業

開講までの道のり

すべての始まりは昨年11月

公開授業の開講に向けた検討の開始は、昨年11月18日の第2回生涯学習教育研究センター運営委員会の合意に始まります。この席で、「熊本大学、琉球大学の事例を取り上げ、開講を前向きに検討する事が合意」されたのでした。ここから、「学内の適当と思われる委員会と調整し、しかるべき組織で決定することなど、全学的合意を得たあとに開講する」ことの必要性が確認されました。また、当初案では、名称は「公開講義」となっておりました。

今年に入り3月17日の第3回当センター運営委員会では、委員長より1月に開催された教務委員会において公開講義について趣旨説明が行われ、センターで「公開講義募集要項等の具体(案)」作成し再度説明する旨依頼されたと報告がありました。続いて事務局で作成した「公開講義試行スケジュール(後期)(案)」と「平成16年度(後学期)鹿児島大学公開講義受講生募集要項(案)」に基づき検討が行われ、公開講義課目に修士対象講義を加え、教務委員会へ提案することが了承されました。これを受けて、全学教務委員会においても公開講義を後期から試行することが了承されました。(5月19日第4回運営委員会で報告)

上位委員会の成行きを見守る

その後、公開講義の実施に関する審議は、上位委員会である第3常置委員会(教育・学生)と第4常置委員会(研究・地域貢献)において進められることになりました。上位委員会へは、当センター関係者の出席は認められず、以後当センターとしては、成行きを見守ることになりました。当センターの意向は、「公開授業(案)募集要項の考え方」にまとめられ、第4常置委員会にて了承されることになりました(6月29日)。他方、第3常置委員会では、6月18日付で学内教員すべてを対象に「公開講座(仮称)」に係る授業科目の調査が行われ、その結果が当センターに届いたのは7月の半ばでした。非常勤講師の先生方を含め95の講義が公開可能なものとして提出がありました。また、公開授業の受講料「一律1科目につき1万円」が理事会で決定されました。ここにきて漸く、全学的に公開授業を開講する決定が下されることになりました。

募集準備に追われた1ヶ月間

上位委員会の審議の過程で名称が「公開講義」から「公開授業」へ変更されたものの、いよいよ公開授業の開講が現実のものとなりました。ただし、すでに時は7月中旬。10月から始まる後期授業に間に合わせるためには、市民に対する募集案内を8月中に済ませ、あわせて公開授業を担当される先生方への対応、事務手続きを遂行する各部局の事務との調整などをこなす必要がありました。

そこで当センターでは、半月あまりで公開授業のパンフレットと授業のシラバスも含む受講案内書を作成し、県および市町村の教育関連施設、新聞等への広報を行い、ホームページにも案内を掲載しました。この作業と並行して、各先生方に実施の意思等の確認を行い、事務担当者を集めた説明会を実施しました。

これからがいよいよ本番

1ヶ月足らずの準備期間にこなすべき業務が集中してしまい、特に公開授業を実施される先生方への対応が遅れる等ご迷惑をおかけする事になってしまいました。申し訳ありません。また、広報期間がわずか2週間程度になってしまいましたが、それでも8月27日の申込み締切日までには36の受講申込みがありました。10月からいよいよ鹿児島大学の正規の授業を市民が学生と一緒に受講する試みが始まります。(文責：小栗)

市電にもポスターが！



お盆明けの

8月16日から28日まで、「鹿児島大学公開授業」の宣伝広告が、市内の電車を飾りました。ポスターは、当センター専任教員の手作り。印刷にあたっては、当大学学術情報基盤センターの青木護氏にもご協力いただき、鹿児島市内を巡回する47台すべての車両に掲載されました。「公開授業」については、まだなじみの無い方も多いと思われるので、「そもそも公開授業とは？」から「公開授業の実施に至るまで」、「公開授業の今とこれから」についてお伝えする特集を組んでみました。



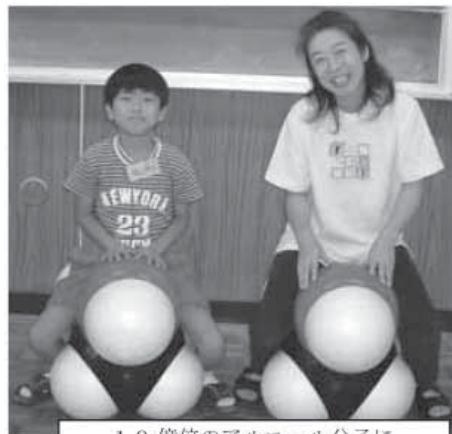
生涯学習教育研究セクター ニュースレター No.10

2004年9月10日発行



❀ 夏休み・親子孫科学教室は大盛況！ ❀

8月25日（水）から28日（土）の4日間の日程で、生涯学習教育研究センターの専任教員・松野修が担当する「夏休み・親子孫科学教室」が開催されました。参加者は、親子合わせて20数名、学生ボランティア3名も加わって、講師の軽快なるテンポに誘われて、驚きあり、笑いありの4日間を過ごすことができました。「親子で学ぶ科学教室とはいかなるものぞ〜?!」と思われる方にぜひ当日の様子を知ってもらいたいと思い特集を組みました。子どもはさることながら、親も一緒に目を輝かし夢中になっている姿をぜひご覧くださいませ。なお、本講座につきましては、当大学学術情報基盤センターの青木護二氏のご尽力もあって、ビデオでご覧いただけるようになっております。詳しくは、生涯学習教育研究センターのホームページからご確認ください。



10億倍のアルコール分子に
またがる
（アルコール好きな）仲のいい親子

親子孫科学教室・分子クンとあそぼう

夏休み親子孫科学教室がはじまりました。

今日は、「ものはすべて原子でできている」ということを勉強しました。BB弾をビニール袋に入れて振ったり、この講座のために作った10億倍の分子模型で遊んだりもしました。

人間が1億分の1になると、こうなります
「つめたい!」というより、「くすぐったい!」

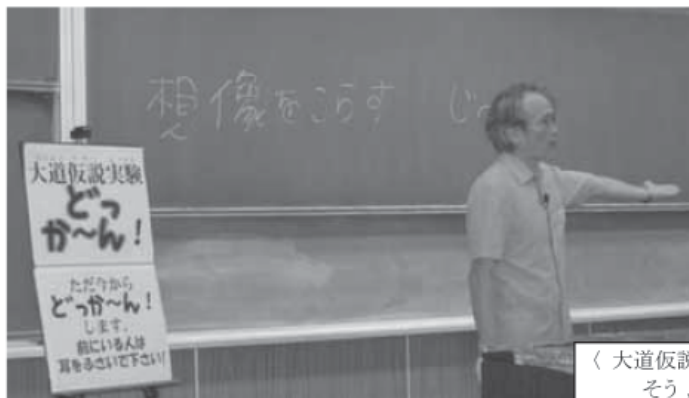


10億倍の窒素分子模型でドッチボール
この遊び、10年後に普及することまちがいない!



分子模型のカードゲーム＝〈モルQ〉の
熱い戦い 子どもでも容赦はない!





4日目は、〈大道仮説実験・爆発 どっか〜ん!〉をやりました。これまでの3日間に学習したことを基礎にして、「問題→予想→討論→実験」という順にお話が進みます。これは「仮説実験授業」と同じ流れです。

そして最後に〈チャッカマン鉄砲〉をつくりました。原子・分子が飛び回るイメージが、できたでしょうか？

〈大道仮説実験 爆発 どっか〜ん!〉のはじまりです
そう、科学者のように想像をこらして……



よい子はマネをしないでください



たのしいけど、こわい!



親子でチャッカマン鉄砲を製作中



お母さんのほうが夢中です

みなさんに楽しんでいただけたでしょうか
原子の気持ちがわかりましたか？



感想文

●平田さつき

最初は、分子なんて見えるはずなんてない！
て思っていました。でも、姿は見えなくても存在するということを実験を通して知りました。自分のこの見える体も、見えない分子から出来ているというのは、不思議な感じがします。四日間、本当に充実していました。

ありがとうございました。冬休みはダイヤの分子模型を作ってみたいデス。

生涯学習教育研究センター ニュースレター No11

2004 年 10 月 8 日発行

アメリカの環境活動家が鹿児島に来る！

9 月 23 日（木）の祭日、アメリカの環境思想家であり、活動家のピーター・バーグ氏（プラネットドラム協会代表理事）とその婦人・ジュディ氏が、鹿児島のこれからの地域づくりを考えるワークショップに講師として来鹿しました。地域のリーダーや若者など 50 名以上が参加した本ワークショップは、生涯学習教育研究センターの呼びかけで、趣旨に賛同する地域の市民団体（地球市民教育ネットワークと KAGOSHIMA 熱闘会議）の協力を得て実現しました。当日は、バーグの指導の下、甲突川流域を中心とした生物圏の地図を実際作成したり、バーグの提唱するバイオリージョンと私たちの普段の暮らしについてじっくり話し合う機会がもてました。当日の詳しい内容は、当センターのホームページでご覧いただけます。この集いを次にぜひともつなげたいと思っています。



仲の良いバーグ夫妻

バイオリージョンと鹿児島の地域づくり

プラネットドラム協会 ピーター・バーグ氏

です。現在地球全体で 50% の人びと（日本は 75% 以上）が都市に住んでいて、21 世紀にこの数はさらに増える見通しです。この変化は大変な変化で、人類は「ホモ・サピエンス・都市種」になってきています。私たちが持続可能な社会を目指すならば、私たちの多くが暮らす都市の暮らしを変えなければいけません。次に皆さんが暮らす地域のバイオリージョンのイメージができるように、地球のいろいろな地域のバイオリージョンを示していきます。



バイオリージョンとは、住んでいる地域を生態学的に認識する概念で、自然を構成している要素を全体と見なし、科学的だけでなく、文化的・社会的な言葉です。バイオリージョンは、気候、地理的地形、土壌、水の流域、土着の生物種によって構成されます。人間の生活を含む生物圏から地球のすべてが成り立っており、バイオリージョンは、生物圏の中の私たちの暮らしを考えることを意味します。

その場所が自然の摂理に従って維持できれば、人びとは持続可能なかたちで生活することができます。この調和のとれた暮らしを過去の人々は行なってきましたが、産業化社会によって自然との関わり方が変わってきました。その一つの大きな理由は、私たちの多くが都市に住んでいる事

（オーストラリアの地図を見せながら）この地図には、2 つのバイオリージョンの特徴が見えます。一つは、湿潤地帯である東海岸、右側の緑色のところが植生を表します。オーストラリアの大部分が乾燥地帯の砂漠で、植生も少ないことが分かります。そして、オーストラリアの人のほとんどは、湿潤な緑のところで暮らしています。（アメリカ西海岸の地図を見せながら）オーストラリアと同じように 2 つのバイオリージョンの特徴が見えます。また、カナダとの国境が非常に人工的であることが分かります。この一帯は、東側のシェラネバダ山脈によって構成され、私たちはそのなかの流域に住んでいます。すべての川はサクラメント川に合流し、サンフランシスコの湾へ、そして海へと注ぎ込みます。レッドウッドの木はここにしか生ない特徴的な樹木です。バイオリージョンが、気候、地



講演後は、甲突川を中心とした鹿児島市のバイオリージョンの地図を参加者全員で協力しながら作成。

形、水、そして動植物によって構成されることが分かります。皆さんも、鹿児島の方々もこの

ように簡単に地図をつくることができますと思います。

持続可能な都市づくり

2 番目にお話したいことは都市のことです。まず、自然災害の復興を契機にエコロジカルな町づくりを始めた南米・エクアドルの事例を紹介します。現地の人びとがエコロジカルな町づくりに努力している様子から、もっと違うバイオリージョンをイメージできると思います。バイオリージョンとして残す公園、バイオリージョン的な産業おこし、バイオリージョンについて学校で学ぶ子どもたち、自転車タクシー、エコの町づくりを祝う祭り等々・・・。

我々は先進国に住んでいますが、バイオリージョンという視点から見ればどこも同じです。今の都市は資源を浪費し、廃棄物を排出し、持続可能ではありません。持続的であるためには、資源を産出し、ゴミを減らすことが必要です。食料、エネルギー、水、モノをつくる材料・原料、さ

らに文化など、持続可能なまちで生きるために必要なものをどのように獲得するか考えてゆかねばなりません。

その一つの手順として、流域に関わっている人びとが学びのグループを創ることです。流域に関わるグループがバイオリージョンの地図をつくり、地域社会の人びとに伝えていくことが必要です。そしてこのような活動を進めいくと、バイオリージョンが政治的な問題、社会的な問題と関わりをもっていることが分かってくるでしょう。

そこで、地域は、エコロジカルでバイオリージョン的な地域計画をつくることができるのではないのでしょうか。

未来の食料、水、エネルギーをどうするかという話し合いをすることが重要です。それを通してバイオリージョン的な教育カリキュラムの展望も得られるでしょう。バイオリージョン的な学習には、高齢者（自然と調和した持続可能な暮らし方を知っている人々）を含めるべきでしょう。

恐らく、皆さんの大きな関心は、生きるための仕事をどう創造してゆけるのかということだと思います。仕事は、リサイクルを通して得るのも一つでしょう。例えば公園のベンチなどをリサイクルでつくることもできるでしょうし、プラスチックや鉄など、リサイクル材を使うことが大切です。バイオリージョンのグループは、政治家に働きかけながら、バイオリージョンに適した仕組みを作ることが必要になってくることでしょう。市は、バイオリージョンに適した産業おこし、仕事おこしに必要な整備を進めることが必要になってくると思います。

ピーター・バーグと語ろう！

こんな意見交換をしました！

- 鹿児島県は、ほとんどの産業廃棄物を他の県に運搬して処理しています。それがほんとうに良いことなんだろうか、と私はいつも思っていて、自分たちの県で出したものは自分たちの県で処理すべきだと思うのです。ところが、自分のところに処理場をつくるのは反対、反対で、できない状態なんです。そこで、どういうふうにすれば処理場をつくることのできるのか、自分のところに処理場をつくることでその人が不利益を被らない、そういう譲り合いができないものか私はいつも考えています。

- 私は大学で地方自治を専攻しているのですが、鹿児島は日本の中で勝ち残っていかなければいけないと思うのですよ。少子高齢化のなか、生産年齢人口を増やしていかなければならない。その時に、ある程度環境と開発、そのバランスをとりながら一票を決める、憲法にある住民自治を行使する、そういうところを私たち一人一人が意識する。そして、地域のことを知る。そこがまず第一歩ではないかな、とそういうふうに思います。

このつづきをぜひホームページでご覧ください！ <http://www.life.kagoshima-u.ac.jp>



「あなたの考える地域とは？」「県」だと思っ人立ってくださ〜い。(頭の体操の時間より)

生涯学習教育研究セクター ニュースレター No12

2004 年 11 月 12 日発行

❀ 稲盛会館での板倉・萌出講演会 ❀

10 月 30 日、鹿児島大学稲盛会館にて生涯学習教育研究センター設立 1 周年記念講演会を開催しました。講演者は、仮説実験授業の提唱者であり、『楽しい授業』の編集代表でもある国立教育政策研究所名誉所員・板倉聖宣（いたくら きよのぶ）氏と、青森県の民間の科学講座企画、経営コンサルタント・萌出浩（もだし ひろし）氏でした。萌出さんには、指笛のパフォーマンスを披露していただいただけでなく、講演直前までロビーで〈おたのしみ科学実験〉のワークショップをしていただきました。講演のタイトル＝「科学で町おこし」そのものの楽しい雰囲気でした。板倉さんには「教育の未来は明るい」と題して講演をおねがいしました。ふつうはここで、「講演会は大成功のもとに終了しました」と締めくくるところですが、



そういう主催者発表はほとんどあてになりません。そこで、板倉さんが提唱する「イタクラ係数」を用いて講演会の成否のほどを、講演内容の真髄にも触れながら特集してみました。

教育の未来は明るい！ その展望は...

板倉・萌出講演会を科学的に評価する

By 松野修

参加者からの評価

参加者数は約 200 人、うち学生が 80 人。講演のあとのアンケートで、「この講演会はあなたにとって有意義でしたか？」との問いに対して、「5＝61%、4＝35%」の回答がありました。（アンケート回収は 88 人）。

しかしこの数字を本当に信用していいのでしょうか？感想文は無記名とはいえ、主催者や講演者に対する気遣いがあります。しかも回収率は 45% にすぎません。そこで、参加者の感想文をどれくらい信用していいかどうかを測る目安として、板倉さんはみずから「イタクラ係数」を提唱されています。

社会の科学研究の道具＝「イタクラ係数」

イタクラ係数とは、「会場での書籍の売上総額」を「参加費収入総額」で割った値です。今回、会場に板倉さん萌出さんの著書や、講演に関連のある書籍を並べました。参

加者がほんとうにその講演が意義のあるものだと感じていれば、関連する書籍を買ってもっと勉強しようという気持ちになります。これまでの経験では参加者が有意義だったと感じれば、イタクラ係数は「1」前後になることがわかっています。ただ、これは社会人を対象にした会合での実験結果です。学生の参加費は社会人の半額だったとはいえ、学生の購買力は社会人の 1/5 程度でしかありません。では、今回のイタクラ係数はどうだったでしょうか？

結果はイタクラ係数＝1.2 でした。大学主催の講演会で、有料で、しかもこの評価なのですから、まちがいに成功と言えます。

社会を数学的、科学的に見る

イタクラ係数について長々と書いてきたのは、実は、このことが今回の講演のテーマでもあったからです。板倉さんは講演の中で「わたしが社会科学の分野でも大きな仕事を残すことができたのは、数量的なセンスが人一倍あったからです。しかしかけ算の九九は、今でもまともにできない。世界の一流の科学者の中にも、数学がまったくできないのに、いや、まったくできないから、大きな仕事をした人が何人もいる。だから〈できない、わからない〉というのは、とても大きな能力です」という話をされていました。



10億倍のアルコール分子を嬉しそうに持ち上げる萌出氏

「講演会に来た人たちが、どれくらい満足して帰ったか」ということは、本人たちに直接聞けばいいようなものですが、しかし社会的

な事象のばあいは利害や
思惑がからむので、アンケートの結果だって信用できない

ことあります。そこで、別の角度から数的に論証できる事柄に目をつけ、仮説を立て、その結果を検証していく。そのばあい細かな数値にとらわれることなく、大局的にしていく…。板倉さんの社会科学分野の仕事は、こういう手法を使ってなされてきました。

言うまでもなく板倉さんの講演は、こういう話ばかりではありませんでした。その内容はいずれ雑誌の記事や本に収められるでしょう。しかし講演というのは、話の本筋ではなく、脇道にそれた話やエピソードにこそ魅力があります。そういう意味では、生の講演を聞いた人はとてもラッキーでしたよね。

参加者の感想から

◆今まで自分の中にない考えがたくさん聞けました。今回は先生のすずめもあって参加したのですが、参加して本当に良かったと思いました。教育とは何なのか？ということをよく見つめ直すとても良い機会になったと思います。板倉先生のユーモアあふれる話し方もとても聞きやすくて、良い時間を過ごせました。

◆いろいろなパフォーマンスが見れて楽しかったです。講演では、本当にたくさんのお話が開けて、いろいろなことを考えさせられました。「何のために」勉強するのかということや、落ちこぼれだからこそ力が伸ばせんだということなど、ハッとさせられる内容も多く、有意義な時間を過ごせました。

◆今日来て良かったと心から思いました。最初に講演してくださった萌出さんのお話はとにかく面白くて、楽しい時間があっという間に過ぎてしまいました。科学のおもしろさ、萌出さん全身から科学の魅力があふれるような方で、もう夢中になって講演聞かせていただきました。また、あこがれの板倉さんにお会いできたこと、本当に嬉しかったです。この

貴重な講演会が鹿児島であって良かったです。ありがとうございました。

◆教育面からだけではなく、人としての視点が幅を広げることができた講演だったと思います。大学に入って一番印象に残っている授業の一つである「たの授」で何度も名前を聞いたことのある板倉さんの講演を実際に聞くことができて、とても良いタイミングに入学して、たの授、仮説実験授業に出会ったなあ、とつくづく思いました。萌出さんの講演についても、とてもインパクトを受けたお話でした。子供たちには、これから、あのような環境で育ってほしいと思います。私は理科系の学部生なので…。理科好きの子が増えてくれたらとてもうれしいと思います。

◆息子が大学生です。大学に行って授業がおもしろくないとおこってばかりで一年生を過ごし、「次の年には教養はいらない、専門を学びたいのだ」と言うようになり、今は「大学の授業を良くする会」を熱心にやっています。「たのしい授業」にも興味を持っています。本日の講演をきき、息子の気持ちがよく分かりました。息子も早く「たの授」に参加して欲



しいなあ、と。

◆萌出さんの指笛は本当にすごいと思った。私もぜひできるようになるまで練習したいと思う。科学で町おこしなんて、あまり普通の人は考えつかないからすごいと思う。私もガリレオの墓参りに行ってみたいと思う。私は学習塾で採点のバイトをしているけど、今日の板倉さんの話を聞いて、うちの塾の子たちは天才だらけだと思った。疑問だらけだということはすばらしいことだと塾の先生に教えてあげたい。

◆萌出さんの町おこし、私も退職する前に参考にして動いてみたいなあという気持ちになりました。パフォーマンス、子どもがとてもいい刺激を受けたと思います。板倉さんのお話、あちこちに飛んでいるようで最後にちゃんとつながっているという、ドキドキハラハラ納得の内容で大満足でした。

生涯学習教育研究センター ニュースレター No13

2004 年 11 月 22 日発行

公開授業の受講生一同が集いました！

今回は初めての試みとして、当センターで「公開授業受講生の集い」を企画しました。事前に案内を差し上げたところ、今年度の受講生 23 人のうち 16 人の方々が 11 月 17 日（水）12 時から生涯学習教育研究センターの演習室にご参集いただきました。すでに同じ講義を受講している方の中には「同級生」として親交を深めている方たちもおいででした。話を



うかがっているうちに、「大学の講義ってのは、社会人をこそ対象にすべきものじゃないのか。なんの社会経験もない学生に大学の講義を聴かせているのが、そもそもまちがいないのか」とすら思えてきたのでした。

はじめに神田センター長から次のような挨拶がありました。「今年度の後期からこの鹿児島大学でも、青年学生向けの講義を一般市民に開放する制度＝公開授業を設けることになりました。まだわたしどもの経験が浅いために、受講生のみなさんにはいろいろご不自由やとまどいをおかけしているかもしれません。これからの公開講座を充実させ、多くの市民の方がたに満足していただけるものにするために、みなさんのお知恵をお貸しください。青年学生の中に、みなさんのような社会人の方が入っていただけるとよい刺激になります。公開授業の第 1 期生であるみなさんのことを、わたしはこの大学の宝だと思っています。なにか要望などありましたら、遠慮なくご意見ください」。

つぎに、お互いがなごやかに話合いができるように、専任教員の松野が当センターが、自ら主催する科学講座の



案内をかねて〈バンジーチャイム〉という簡単な科学実験を披露しました。

食事をしながら受講生の方がたから自己紹介をかねて、ご意見やご感想をうかがいました。中にはこんな話がありました（記憶に頼って書いているので、まちがいはあるかもしれません）。

・わたしは数学の講義を受講しています。毎回、講義のおしまいに演習問題を解いて提出することになっているのですが、チンプンカンプンで（笑）。でも「あなたは社会人だから」と先生が特別な配慮をしてくださって、わたしのそばに来て小さな声で「ここは〇〇だから」と、そっと答えを教えてもらって（笑）、なんとかしのいでいます。

・わたし自身、あるカルチャーセンターで木彫りを教えています。そういう指導をするうえでも、いま受講している彫塑はたいへんいい勉強になります。おいそれと指導をうけられる先生ではないので、こういう場を提供してもらってたいへんありがたいです。

・教育学の講義を受講しているのですが、毎回、まったく知らなかったことばかりでとても新鮮です。今日は『世界の国旗』の話聞かせてもらいました。国旗のデザインにはその国の政治や宗教が反映しているというお話です。学生時代にはこんなことまったく教えてもらってませんでした。この講義はオススメです。みなさんも来年、受講されたいですよ。

・10月30日の板倉先生の講演会に参加させていただきました。そのとき話題になった分子模型がここ（生涯学習教育研究センター演習室）においてあるので、すっごくくつきしいというか、うれしいです。講演会のときにはさわられなかった分子模型をここでさわることができて、それだけでも満足です。

・静岡でスキューバ・ダイビングのインストラクターをしていました。水産学部の講義が開講されていると聞いて、受講することにしました。水産学部にはもっといろいろな先生がいるはずなので、ほかの講義も聴講できるようにしていただきたいです。公開授業の受講を機会に、いろんな人とのつながりができればいいなとも思っています。そういう意味でもこういう集まりをこれからも開いてほしいです。

・建築関係の仕事をしていることもあり、木材の講義を受講しています。仕事から、木材のことはまんざら素人じゃないつもりでいたのですが、講義を聴いてみるとなかなか奥が深く、いまさらながらいい勉強になってます。

・大学の構内を歩いていると姪に会うこともあります。「おじさん、どうしてこんなところにいるの？」と聞いたら、「おじさんも勉強しているんだ」と自慢しています。



・大学の構内を歩いていると姪に会うこともあります。「おじさん、どうしてこんなところにいるの？」と聞いたら、「おじさんも勉強しているんだ」と自慢しています。

・息子が大学の工学部にいますが、講義がおもしろくないとかで休学中です。わたしはといえば、講義を聞いて、楽しくてしょうがないんですが、これはどういうわけなのでしょう？

・垂水から毎週通っています。車をフェリーにして、バスで大学まで通っています。家庭のづごうで1週間に1度だけの聴講ですが、なんとか時間をやりくりをして。大学に来られるのを毎週たのしみにしています。

・250人もいる教室の中で、いつもいちばん前の真ん中に陣取って聴講しています。ミヒャエル・エンデの作品を解説してくださるのですが、話は時間論、環境論にまで話がひろがっていった、すっごく刺激的です。この講義もオススメですよ。

・この鹿大を卒業して何年かぶりに講義を受けています。毎回、先生の話されることを一言も聞き逃すまいと集中してノートを取り、家に帰ってから全部清書しています。学生時代にはまったく勉強に興味がもてなかったのですが、今はとても真剣に学ぶことができます。

■ **そ** のほか、こんな要望もありました！

● 老人介護の方法、英会話のブラッシュアップ、日本文学、天文学など、さまざまな分野について、もっと間口を広げて講義を開放してほしい。

● 臨床心理士などの資格をとりたいのだけれど、どういうステップを踏めばいいかわからないので、キャリアアップのためのガイダンスをしてほしい。公開授業は「この分野でやっているかどうか」の見当をつけるうえでとてもいい機会だと思う。

● 民間のカルチャーセンターではなく、わざわざ大学の公開授業を受講するの

は、若い学生さんたちと交流をもてるからだ。いまのところは、講義が終わったあとと青年学生とゆっくり話をする機会がないが、そういう会も設けてほしい。

● 市電に吊ってあったポスターが目飛び込んできて「これだ！」と思った。ただ申込み期限が当日で、すぐに大学に来て手続きをとった。もっと宣伝の期間を長くしたほうがいい。いい講義についてはどんどん口コミで宣伝してあげるの、大学も宣伝の方法を工夫したほうがいい。

じつは公開授業の実施にこぎつけるまでには、ここに書けないような苦勞がいっぱいあったのですが、今回、受講生のみなさんの話をうかがって、「やはり公開授業を立ち上げてよかった、苦勞が報われた」という気持ちになりました。受講生の方たちは、大学の講義に満足しているだけでなく、さらにこれをきっかけに、交流の輪を広げたり、仕事に活かしたり、キャリアアップを目指そうとしていることもわかりました。今の段階ではわたしたちがどんな提案ができるか、まだわかりませんが、受講生のみなさんのそういう要望に実に応えていきたいと思います。

生涯学習教育研究セクター ニュースレター No14

2005 年 1 月 11 日発行

もっと気楽に、楽しんで公開講座をやっていききたい

11 月 30 日、公開講座を担当された方がたに集まっていたいて、公開講座の現状と課題について会合をもちました。「国費で好きなことを研究させてもらっているのだから、その楽しさを少しでも多くの人におすそわけしたい」という素朴な気持ちを実現できるような、そういう公開講座の仕組みであってほしい。大学の公開講座は、大学の財源を補うためのものなのか、それとも個々の企画はたとえ赤字であっても、〈開かれた大学〉として大学のイメージアップをはかるためのものなのか- など、短時間ながら本質的な議論ができました。「鹿児島中央駅近くにサテライト教室を確保して、1 コマ 50 分、1 回 500 円のミニ講座を講師入れ替わりで開いたらおもしろいんじゃないか」なんていう名案（?!）も飛び出しました。今回はこの会合での議論だけでなく、「全国国立大学生涯学習系センター研究協議会」（11 月 26 日、琉球大学で）の報告をかねながら、これからの公開講座のありかたについて当センターの考え方をお伝えします。



▼ 担当者が報われる公開講座の仕組みを ▲

大学主催の公開講座についてはこれまでも、（１）一律に講習料が決められているので柔軟な企画を立てられない、（２）講習料も他の団体が主催する講座に比べて割高で、参加数が伸びない。（３）収入とは無関係に講師料が配分されるので参加者数を増やす意欲がわからない、などの欠陥が指摘されてきました。これらの点については独法化によって、大学独自の判断で改革できることとなりました。とはいえ今年度は専任教員が着任して間がなく、公開講座の制度についてじゅうぶんの把握できていなかったもので、今年度中に改革案を提出するべく議論を重ねてきました。

ところで 11 月 26 日には当センターの教員 3 人が「全国国立大学生涯学習系センター研究協議会」に出席しまし

た。ここでは、各大学での公開講座改革の試みが紹介されました。そのなかでわたしたちが特に注目したのが香川大学のパイロットプロジェクトでした。香川大学では（１）公開講座の講習料は企画担当者の判断にまかせる、（２）講習料収入のうち一律 3 万円を生涯学習センターの必要経費として拠出する、（３）講師料を廃止し、必要経費を除いたあとの講習料収入は、企画担当の部局に研究費として還元する—という試みをしています。文部科学省生涯学習推進課長も、この試みを「注目すべき先進的な事例」として講演の中で指摘していました。

香川大学方式なら、講習料の自由化によって地域住民の幅広い要望に応えられます。講習料の一部を研究費として還元することで、担当者のインセンティブを引き出すことができます。加えて、参加者募集の段階で必要経費分に満たない応募者しかなかったときは、中止できるという利点を持っています。わたしどもとしては、学内事情がちがうので全く同じシステムを作るのはムリだとしても、基本的には同じ方向にそって公開講座を改革していきたいと考えています。11 月 8 日の運営委員会では、講習料規定の弾力化を決定しました。現在、理事会レベルでの承認を引き出すべく、事務局と議論を詰めています。

第26回 全国国立大学生涯学習系センター研究協議会



生涯学習教育研究センター に対する要望

公開講座担当者会議では、さまざまな要望がありました。講習料の徴収手続きなどはもっと簡素化できないか。個々の担当者がバラバラに宣伝しているのではインパクトが少ない。講座が集中する時期に「鹿大の公開講座」として新聞広告を出すことはできないか。大学全体の広報活動の一環として、たとえ赤字だとしても開催すべき企画があるはず。そのための財源を生涯学習教育研究センターが確保すべき - などなど。これらの要望は公開講座を企画担当している当センターの教員にとっても他人ごとではありません。今回の議論を真摯に受け止め、なによりも企画担当される方がもっと気軽に、そしてだれもが楽しんで公開講座を実施できるようお手伝いさせていただきます。



〈鹿大のブランド〉 を高めるような公開講座を

担当された方たちのお話を聞いてみると、制度的な欠陥があるなかで、個々の担当者が献身的な配慮や努力をされていることが伺われ、頭の下がる思いでした。その一例をあげると……。公開講座費用が一律に減額されて配分されるので、講師料はもとより個人研究費から持ち出しせざるえない。計画書を提出する時点で、減額を見越して参加者見込みを水増しすればいいのだろうが、それでは「ウソをついた者だけが得をする」というモラル・ハザードを助長する結果になってしまう。学生ボランティアがアシストしてくれたおかげで、講座の参加者にも好評だったばかりでなく、学生にとってもすぐれた教育の場になった。

ところが参加者が少ないので、学生にバイト料も支払えないでいる。講習料があまりに高額なので、計画書に提出した時間数をこえて、講座の修了後も適宜参加者の希望に応じて講座を延長して実施している。悪天候のために講座を中止せざる得なかったときには、「無料券」を配布して、参加者のつごうのいいときに補償した。そのために教員の研究活動に支障をきたすほどの負担をせざるえなかった、などなど。



こういう目に見えない努力に支えさえられて、これまで鹿大に対する市民の信頼を培ってきたといえます。これから公開講座についてはさまざまな試みがなされているわけですが、しかし財源確保だけを目指した、質の悪い講座を提供すればたちどころに信用を失ってしまいます。そのためにも、企画する側も参加する側も納得できるような、質の高い内容を提供できる仕組みを作るのもわたしどもの使命だと考えています。そのためにどうかご支援、ご理解をおねがいします。

次年度公開講座の申請は2月中旬から

現在、講習料規定の弾力化等について事務局と調整中です。2月中旬頃には、2005年度の公開講座の企画を募集します。募集案内は、各教授会を通して伝達されることになるかと思いますが、当センターのホームページでも逐次ご案内申し上げます。なお、申請に当たっては、当センターホームページ〈学内向け〉より、申請書をダウンロードできるように致します。ぜひご利用ください。

×××××××××××××××××××××××× ホームページをぜひご覧下さい

生涯学習教育研究センターは、地域の自立発展を支える生涯学習の研究と教育を実践することを目的に、学内共同教育研究施設として2003年4月に新設されました。同年11月には、専任教員2名が着任し、鹿大に蓄積する知的資源を地域に還元すべき、新しい体制を作りつつあります。学内外に常に開かれたセンターを目指しております。センターの活動をホームページでぜひ一度ご確認ください。

<http://www.life.kagoshima-u.ac.jp>

××××××××××××××××××××××××

生涯学習教育研究センター ニュースレター No15

2005 年 1 月 28 日発行

2005 年度「公開授業」と「公開講座」 の申請受付がはじまりました



来年度の公開授業の申請をおねがいします

公開授業とは？

「公開授業」とは、学部学生などを対象とした講義、演習を一般の社会人に開放するもので、今年度の後期から試行的に実施されてきました。

当センターではこれまで、公開授業の受講者と担当教員に集まってもらい話し合いの機会をもってきました。受講者の講義に対する評価はきわめて高く、「こういうすばらしい講義をもっと多くの人に聴かせてあげたい」、「学生時代には怠け者だった自分が、今はここで学ぶのが楽しくてしょうがない」という声もありました。担当の教員からも「学部学生に対していい刺激になっている」、「社会人が参加しているおかげで講義の雰囲気はよくなった」などの評価を頂いています。

申請方法は？

現在、来年度前期・後期の公開授業の申請を受け付けています。「授業科目調査書」は当センターのホームページのトップページから「学内向け」にアクセスすると調査書がダウンロードできるようになっております。必要な事項を書き込んだうえ、各学部の教務課など担当事務局に提出してください。**締め切りは2月14日です。**なお、当センターで、データ処理を行う都合上、調査書を電子メールで右欄（松野）にも送信くださるようお願い申し上げます。

メリットはどこに？

今年度（後期）は70をこえる科目が開放されました。今年度、開放してくださった方はもちろん、今年は開放されなかった方も、今回はぜひともよろしくおねがいします。公開授業では1科目、受講者1人につき1万円の講習料を徴収します。このうち7割は担当してくださった方が所属する学部に配分します（担当者の研究費として配分されることを想定しています）。

受講者の要望として、自由に使える時間の制約があるので、2時限目か3時限目の講義のほうが参加しやすいとのことでした。条件があれば語学、宇宙・天文、自然科学一般などの講義を受講したいという声もあがっています。また、少人数の講義のほうが、社会人が参加することによるメリットは大きいといえます。

今回は「講義を開放しても受講者がいなかった」という科目が半数以上ありました。しかしたとえ受講者はいなくても「講義を市民に開放した」という実績は残ります。「市民に開かれた大学」としての姿勢を示すためにも、ぜひともご協力をおねがいします。

センターホームページ
<http://www.life.kagoshima-u.ac.jp>
 調査書送付先アドレス
matsuno@life.kagoshima-u.ac.jp
 TEL&FAX : 099-285-7292

公開講座の講習料が弾力化する見通し

来年度の公開講座の申請もおねがいします

公開講座とは？

公開講座とは、大学が主催する市民を対象とした講座です。「研究プロジェクトの成果を市民に公にする」など、独自の予算で開催される場合もありますが、鹿児島大学の「公開講座制度」を使って開催する方途も用意されています。

「環境問題の重要性を市民に訴えたい」、「市民の切実な教育問題についての要望に応えたい」などという場合には、公開講座の開設をぜひとも検討してみてください。これまで公開講座を開催されたことがなかった方でも、開催へ向けてできるだけサポートをいたします。まずは当センターの小栗までご相談ください。

TEL&FAX: 099-285-7293, 内線: 7299,
E-mail: oguri@life.kagoshima-u.ac.jp

公開講座の多くは不定期に開催されます。そこで当センターでは公開講座のスケジュールをとりまとめたうえで、自治体、マスコミなどに宣伝しています。(もちろん担当者が独自に宣伝されることを妨げるものではありません)。

講習料の改訂

ただし公開講座の講習料については改訂を検討中で、まだ役員会の決定をみていません(当センターの原案については学部長、運営委員に送付してあります)。2月中旬には決定される見通しです。

改訂のポイント

今回の改訂のポイントは、(1) 公開講座の内容に応じ講習料の基準を区別する

(2) 内容によっては区分に係わらず、担当者の判断を優先し講習料を認定できるよう保証する。

(3) 大学の基準に基づき一律に定められていた講師料(謝金)・旅費を廃止し、各講座の収支バランスを考えて担当者が柔軟に公開講座予算を支出できるようにする。

(4) 公開講座収入の7割は担当者の研究費等に充当できるようにする(ただし各学部の事情もあるのでこの旨は明言できません)。

(5) 公開講座の収入の3割は当センターの予算に繰り込み、講習料収入を期待しない社会貢献を目的とする講座を開催できるようにする、の5点です。

申請方法は

現在、来年度の公開講座について申請を受け付けています。「公開講座実施計画書」も当センターのホームページからダウンロードできます。必要な事項を書き込んだうえ、各学部の教務課など担当事務局に提出してください。**締め切りは2月14日です。**

なお、データ処理を行う都合上、実施計画書は、下記アドレスにも電子メールで送付下さるようお願いします。

センターホームページ <http://www.life.kagoshima-u.ac.jp>

計画書送付先アドレス matsuno@life.kagoshima-u.ac.jp

TEL&FAX: 099-285-7292

○ ご確認ください ○

公開講座の予算については、講習料の改定がありしだい、改めて「公開講座予算計画書」の提出をお願いすることになります。その際には、収入と支出のバランスをとること、講習料収入の3割は生涯学習教育研究センターに配分される(だろう)ことにご留意願います。



生涯学習教育研究セクター ニュースレター No.16

2005 年 3 月 29 日発行



/// 改めて公開講座の申請をお願いします

事務局から4月8日締め切りで、公開講座の申請をお願いしています。すでに公開講座実施計画書を提出して下さった先生方には、二度手間をおかけすることになって誠に申し訳ありません。これも、公開講座のシステムが大幅に改訂されたことに伴う〈生みの苦しみ〉です。どうかよろしくご協力ください。

/// 公開講座のシステムが大幅に変わります

当センターニュースレターNo.15で「公開講座の講習料が弾力化する見通し」をお伝えしましたが、このほど公開講座の講習料の改定が決定しました。講習料の改定にともない、公開講座のシステムそのものが大幅に変わりました。要点を以下にお伝えします。改定された点をよくご理解のうえ、実施計画を推進するかどうか、あらためてご検討をお願いします。なお、ご不明な点等ございましたら、当センターの専任教員である〈松野：内線#7298〉もしくは〈小栗：内線#7299〉までお問い合わせください。



● 公開講座の収入の7割は担当者の〈研究費〉へ

公開講座の収入の7割は、担当者が使える運営交付金（研究費）として配分します。

国立大学の時代には、参加者の人数、収入にかかわらず規定の講師料（謝金）が支払われていました。ですから公開講座が赤字でも黒字でも、担当者には何のリスクもありませんでした。しかし今年度からは、参加者の多寡によって配分される額が変わってきます。収入が多ければ、それに見合った額が担当者の部局に配分されます。

● 公開講座の実施前の予算配分はありません

また従来は、公開講座実施経費は（予算請求額を一律に減額したうえで）、公開講座の実施前に配分されていました。しかし今年度からは、公開講座の実施前に予算の配分はありません。したがって実施にあたっては、まずは担当部局の予算から必要な経費を執行していただくことになります。経費は公開講座終了した後、所定の金額が配分されます。事務局にはできるだけ速やかに会計処理をするよう指示してあります。

● リスク回避の方策-最小催行人数の導入を検討

このため、参加予定者が少ないばあいには赤字になることも考えられます。そこで、参加申込みが予定を下まわった場合には企画を中止できるよう、次回の運営委員会に原案を提出します。あらかじめ最少催行人数を設定し、募集期間と払込期間を分けておき、予想を下まわった場合には中止する旨を周知すれば問題ないと考えています。

● 公開講座収入のうち3割の使い道

1/3 は広告費・通信費
2/3 は公開講座全体の調整額

公開講座収入のうち、3割は「本部経費」とします。このうちの1/3は広告費、通信費などの経費として予定しています。あとの2/3は、公開講座全体の調整額とします。これを公開講座の担当者に追加配分するか、生涯学習教育研究センターが独自に企画する公開講座のための費用とするかは、これから議論を深めます。わたしたちとしては、大学が開催する公開講座のすべてが、〈黒字収入の見込みのあるものだけ〉に限られていいとは考えていません。たとえ収入は見込めなくても、社会的弱者や喫緊の課題のために、たとえ赤字になっても大学として取り組むべき企画があるのではないのでしょうか？

いずれにしても、この経費の使い方については、公開講座担当者にも兼務教員になっていただき、広く意見を交換できる場を設けます。

● 講習料の基準を3つに区分

公開講座の内容に応じて講習料の基準を3つに区別しました。(1) 専門職向けリカレント講座、(2) 社会人向け基礎教養講座、(3) 青少年向け基礎教育講座の3つです。

講習料の詳しい算定方法は事務局からの書類に添付されていますので参照してください。講座内容によっては以上の区別に係わらず、担当者の判断を優先して講習料を決められるようにしたかったのですが、事務局との検討の結果、残念ながらこれは実現しませんでした。

● 無料で公開講座を実施する方法

各部局等の予算を使って無料の公開講座を開催することもできます。

実施計画書には(1)「センターの予算を使って実施する場合」のほかに、(2)「部局等の予算を使って実施する」、(3)「外部資金を使って実施する」という3つの選択肢を用意しました。部局や外部の資金などを使って公開講座を実施する場合には、規定の公開講座講習料は徴収できません。したがって〈収入の7割配分〉もありません。にもかかわらず、実施計画書のチェック欄に「有料」とあるのは、「資料代などを参加者に実費負担してもらう」という意味にすぎません。ですから「部局等の予算を使って実施する」ないし、「外部資金を使って実施する」場合には、「経費支出計画書」の提出は必要ありません。これらの公開講座についても、当センターでとりまとめて広報させていただきたいので、実施計画書の提出をお願いしたまです。

● 「公開講座経費支出計画書」の書き方

「公開講座経費支出計画書」にある「支出予定額」は、「収入予定額」

の7割で書き込んでください。公開講座収入の3割は自動的に本部経費として差し引かれますから、それを見込んで予算書を作らないと赤字になってしまいます。

「支出予定額」には「学外講師の謝金」、「旅費」、「物件費」の3項目のみです。「学外講師の謝金」、「旅費」を差し引いた額をすべて「物件費」にまとめて書き込んでくださればそれでけっこうです。「物件費」の内訳を書き込む必要はありません。この物件費が事実上、担当者の研究費などになると考えてください。

受講生の材料費、資料費、交通費などは、参加者の実費負担にすることもできます。この場合、参加者には規定の基準にもとづいた講習料だけを大学宛に振り込んでもらうことになります。実費負担分は直接、担当者が徴収してください。言うまでもありませんが、募集にあたっては、規定の講習料と教材費などの実費負担額を明示してください。